

「大切なことを大切にできる研究会」

会長 野間 義晴 (横浜 元石川小学校)

今年度、5月の総会を皮切りに、各地区の部会長の先生方とともに、令和11年2月に開催される全小社研神奈川大会に向け、見通しをもちながら準備を始めることができたことは、本研究会にとって大きな一歩であったと感じています。

今年度の歩みの中で、改めて実感したことがあります。それは、同じ空間に集い、顔を合わせて研究を進めることの価値です。また、先生方の負担をできる限り軽減しながら、質の高い研究を進めていく方法について、試行錯誤を重ねる一年でもありました。こうした積み重ねのすべてが、研究会の「大切なもの」を確かに支える土台となっています。

5月の総会では、各地区が一堂に会し、今年度の活動方針を共有しました。8月の研修会では、横浜市立日枝小学校を会場として、各地区から実践提案をいただくとともに、文部科学省教科調査官・小倉勝登先生より、指導要領改訂の方向性を見据えた社会科授業の核心について示唆に富むご講演をいただきました。さらに、川崎地区で開催した授業研修会では、3～6年のそれぞれの会場に分かれての公開授業が展開され、学びの本質を深める研究が示されました。そして2月の県中央大会・川崎大会では、各地区が掲げる研究テーマにそったオリジナリティあふれる実践が報告され、本県の社会科教育の厚みと可能性をあらためて確認する機会となりました。

今年度の研究は、子どもの姿をもとに、神奈川県の研究主題である「人の営みに学び、未来を創る子どもが育つ社会科学習」に真正面から向き合う一年でもありました。来る全小社研神奈川大会に向けて、主題や研究の方向性がいよいよ具体的に動き始めています。

これからも私たちは、「大切なものを大切にできる研究会」であり、オール神奈川で社会科研究をさらに深めていきたいと思えます。

令和7年度の主な研究活動

- ① 5月22日(木) 部会長会(ニュースパーク)
- ② 8月 1日(金) 午前
 夏季学年別研修会(日枝小学校)
 同 午後
 夏季特別講演会(南公会堂)
 講師 小倉 勝登 先生
 (文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官)
 演題
 『次期学習指導要領を見据えたこれからの社会科学習』
- ③ 1月21日(水) 第24回 県小教研社会科部会
 ・川崎市立下平間小学校(3年)
 ・川崎市立久地小学校(4年)
 ・川崎市立西管小学校(5年)
 ・川崎市立橋小学校(6年)
- ④ 2月 4日(水) 県小教研中央大会川崎大会

夏季特別研修会

8月1日(金) 日枝小学校において、夏季学年別研修会が開催されました。各部会ともに各地区を代表する先生からの実践提案がなされ、熱心な研究討議が行われました。

「わたしたちのまちのお店」

～地域 みんなが買い物に行く Tストア～

横浜・鴨志田第一小学校 小池 智宏(3年)

子どもが自ら問いを見だし、主体的に学び続けることができる単元づくりを目指して、地域にある商店を取り上げて単元づくりを行った。

本校では販売の学習の見学先がこれまでなく、訪問授業を行ってきたが、実際に見学に行つて共通の体験をすることで自分なりの考えをもつことを意図して、新たに見つけた見学先に見学に行き、そこから売り上げを高める工夫について考えるよう単元を構想した。

子どもたちはお客さんを集めて売り上げを高める工夫について自分なりの予想をして、それを確かめるために主体的に見学に臨んでいた。また、商店で働く人がお客さんから見えないうちでお客さんが買いやすいことを考えて作業をしている姿を見て、地域の商店で働く人に愛着をもつ姿が見られた。

また、実際に見学に行った際に、旬のスイカを様々な大きさにカットしている場面を見たことで子どもたちは、「(大変そうなのに)どうしてスイカをいろいろな大きさに切って販売をしているのか」と問題意識をもつことができた。当初想定していた学習問題とは違った切り口の問題意識だったが、子どもたちの問題意識に合わせた学習問題に変更したことで、子どもたちが自分たちの家庭の買い物の様子や買い物をしてきた人の様子から、自分なりの考えをもって話し合い、「いろいろなお客さんがいるから、切っている」「だから、たくさん買ってもらって売り上げが高まっている」ことに気付いていた。

この単元を通して、3年生らしい問いをもち、自分なりの考えをもって学ぶことができたと考える。

「店ではたらく人と仕事」

～見つけた！スーパーマーケットの工夫や努力～

川崎・鷺沼小学校 中嶋 一也(3年)

本単元では、よく利用するスーパーマーケットがどのようにしてお客さんを集めようとしているのかという問題に対し個人の調査をきっかけにして、学級全体で解決していった。

今回取り扱ったスーパーマーケットは、児童の調査から、最も活用されている身近なスーパーマーケットを取り扱った。実際に家族で買い物に出かけたことはあるが、どのような売り上げを高める工夫があるかは把握していない。スーパーマーケットで働く人達が強みを生かし、消費者の願いや想いを踏まえて売り上げを高める工夫をしていることを理解できるような単元を構想した。

一人一人が単元の学習問題を解決するために、自分の問いをもち解決に向けて追及していく学び方の良さに気付くことができるような声掛けや価値付けをしてきた。また、自分の問いを解決するために考えていく中で「まだ、分からないところがあるから調べたい。」や「違う考えをもつ友達の考えも聞きたい。」など、主体的に学びに向かう様子にも価

値付けたり、自分の問いを解決するため自分から学習を調整する時間の確保をしたり、支援してきた。その結果、一人一人が自分の問いに対して、こだわりをもった活動になった。中には、授業時間以外にも自ら調査したり、自分の問いを解決するために、必要になりそうな情報をもっている友達と協働したりする児童も増えてきた。これからも自分の知りたい、調べたいことについてこだわりをもち、夢中になって取り組む姿を大事にしていきたい。

「ごみのゆくえ」

横浜・稲荷台小学校 戸川 真理子(4年)

本単元では、今年度から始まった横浜プラ 5.3 計画に着目し、ごみを減らすために自分ができることを考えて選び、実行しようとする子どもの姿を目指した。授業づくりにあたっては、①数量的数値を体感させ理解の土俵をそろえること、②本気の学習問題において資源循環局の努力や思いが伝わる資料を提示すること、③子どもたちのふり返りを生かしたみとり、の3点を柱とした。

本単元の成果として、単元を通して数量的数値の体感を行ったことで、クラス全体の共通認識を図ることができ、問題解決の話し合いにおいて互いの意見を齟齬なく理解し合う姿が見られた。また、ふり返りを生かしたみとりにより、資料と自分の考えを照らし合わせた際の思考の揺らぎが明らかになり、それに対する聞き手の共感や納得の反応も見られた。

課題は、資料提示において資源循環局職員の思いを十分に伝えられなかった点である。職員の思いを示し、話し合う場を設定することで、より横浜市の取組を拠り所とした学びにつながったと考えられる。

単元後、子どもたちはポスター作成などの啓発活動を行った。この経験は他教科にも生かされ、「今の自分にできること」を考え実行する素地を養うことができた。

「わたしたちの県のまちづくり」～歴史あるまち小田原市～

横須賀・田戸小学校 木村 亮(4年)

本単元では、県内の市の特徴やまちづくりの取組を調べる活動から、まちづくりには市民の生活や市全体をよくしようとする人々の思いがあることに、児童が気付くこと、また、横須賀市との比較をすることで、自分達の住む市のまちづくりを改めてとらえ直すことをねらいとした。

遠方で訪れた小田原城や小田原市のまちづくりについて知りたいことや疑問が学習の中で生まれるような問いかけや対話を意識した。そして、自分達が調べたいと思ったことを、小田原城や小田原市役所で働く人、小田原在住の人に話を聞く機会を設けたことで、想像ではない、小田原市民の小田原城に対する本当の思いを実感することができた。

児童の振り返りには、「私たちがいる横須賀市の中で、小田原城のように未来に残したいものを考えていきたい。」というように、自分達の市と照らし合わせて横須賀市の未来を考える子どもの姿も見られた。まちづくりには人の思いがあり、その思いがあるからこそ、自分の市が好きになれるということにも教材を通して気づくことができた。「人々の協力関係」に目を向けることは、「公民的資質」の育成につながるため、行政の視点を取り扱ったことは効果的であり、継続していきたい。

事例地の選定については、「伝統的な技術を生かした地場産業が盛んな地域」の部分に関しては浅くなってしまった。どの市(町)を教材化するかについては、今後は学習指導要領の内容を丁寧に確認し、子どもの学習の実態に合わせた指導計画の作成や授業の組み立てを行うことにより、よりよい学びを模索していきたい。

「未来を支える食料生産」

～福島県いわき市の米づくりから考える～

横浜市・駒岡小学校 能登 清仁(5年)

本単元では、日産追浜工場の方々の営みを通じて、児童に「ものづくりのプロの凄み」と「改善」の考え・行動の重要性を学ばせた。工場見学を通じて、作業員や案内係、ものづくりキャラバンの方々から、1秒、1mmを研ぎ澄ます姿勢を学び、その後の学習や学校生活で問題解決に役立てていった。児童が直近の豊かな未来を創るための基礎として、生活の質を向上させる取組を行った。

しかし、自動車産業が迎えている「100年に1度の大変革期」を考えると、長期的な視点での未来を創るには別次元の対応が必要だ。自動車とインターネットの連携によるカーシェアリングの進展や、自動運転の安全性向上、脱炭素化に向けた代替エネルギーの導入など、現場からの改善では対応し難い新しい課題に直面している。日本が岐路に立っている今、児童が未来について考えるには、広範囲な知識と新しい視点を持つことが重要である。

そのために本実践では、いくつかの視点をもって指導の工夫を重ねた。例えば、最先端の情報から児童が考える足場を形成できるように本質を変えずに資料を加工したり、「日本一の自動車会社をつくろう」という活動に現実味ができるようにICTを活用したりした。

変化の激しい時代で未来を創る児童を育てるために、多面的・多角的な視点から現状に希望を見出すことができる単元づくりを目指した。そうした学習をいくつも経ることで、持続可能な社会の構築に向けた公民的資質の基礎が形成できると考える。

「未来とつながる情報」

相模原・淵野辺東小学校 池上 順也(5年)

本単元では、児童が社会的事象を「自分事」として捉え、自律的に課題を解決しようとする態度の育成を追求した。題材には身近な「コンビニエンスストア」を選択し、POS システムの仕組みや「未来のコンビニ」の動画を通して、生活の中の違和感から生まれる内発的な問いを喚起する構成とした。

指導においては、ICT 活用の利便性という「光」の側面のみならず、高齢者の利用困難や個人情報流出のリスクといった「影」の側面を意図的に提示した。これにより、児童は単一の解決策に固執せず、多角的・多面的な視点から考察を深めることが可能となった。

授業の軸に据えたのは、個人、ペア、全体という対話の構造である。意見の「ズレ」や「揺らぎ」を学びの源泉と捉え、AI レジの利便性に対して「お年寄りが安心できるか」といった問い返しを促した。その結果、肯定・否定の二元論を超え、多様な価値観を尊重しながらこれからの情報社会の在り方を主体的に展望する姿が見られた。

成果として、統計資料を根拠に論理的に考える力が育まれた。一方、今後は経営者や地域住民といったより多様な立場からの思考を促すことが課題である。また、板書の工夫により議論を可視化し、全員で学びを共有する手立てを強化していく必要がある。

「全国統一への動き」

川東・文ヶ岡小学校 古本 健優(6年)

目指す児童の姿を「授業内で自ら探究する姿」「授業外での調べ活動をする姿」「実社会とのかかわりを通して見出す姿」の三つとし、全国各地で武士たちが戦う時代、戦国の世の中を題材に授業づくりに取り組んだ。子どもたちは「強い武将は誰か」や「力、恐怖で従えたのではないか」

等、戦いに焦点化された認識があるようなので、政治や文化的な視点、天下を統一していくためにどのようなシステムを構築したのかなど、違った視点から歴史的事象を探求できるような指導計画を考えた。

具体的には、民か武士かいずれかの立場を選択させ、「3人(織田信長・豊臣秀吉・徳川家康)のうち誰についていきたいか」という単元を貫く学習問題を設定した。歴史的事象を押さえながらも史実から当時を生きた人々へ思いを寄せ、学習を楽しんでいる子どもたちの姿が見られた。

子どもたちの姿から、学習が深まりを見せるのは、知識の背景にある人の営みや思いなどに気づき、自分とのつながりを感じた時なのかもしれないと考えさせられた。

部会では、人物の性格を根拠に論を展開しすぎてしまう子どもも見られ、その際には発問や問い返しなどによって史実を改めて想起させる必要ではないかとの意見をいただいた。また、扱った単元では、徳川家康の事業や政治については触れられておらず、学習指導要領においても「織田・豊臣の天下統一」と「徳川による江戸幕府の始まり」は歴史上の事象として厳密に区切られているため、設問は適切だったかといった意見もいただいた。このあたりの解釈については今後も検討していきたい。

「幕府の政治と人々の暮らし

～泰平の世を作り上げた江戸幕府～

川崎・東大島小学校 市村 和那 (6年)

本単元では、子供達が武士の政治が安定したことを「争いが少なくなった」と捉え、既習の時代と比較しながら調べていけるように単元を構成した。その中で歴史学習の視点としてきた「政治の仕組み」「外国との関わり」「人々の暮らし」について様々な資料から自分に合った方法を選び調べてまとめることで子供達が主体的に取り組めるのではないかと考えた。研究の重点を「①魅力的な教材」「②調べ学習と考えをまとめるための多様な学習活動」「③わかったこと共有して学びを深める学習活動」と設定して授業実践を行った。

①では映像資料を活用することで「なんで?」「どうして?」といった知りたいという思いを引き出すことができた。②では、初めに「政治の仕組み」について全員で調べることで「外国との関わり」「人々の暮らし」について同じ土台に立ち、それぞれの方法で調べる姿が見られた。また、ピラミッドチャートを活用し調べたことを整理することで政策の意図や効果について自分なりの考えをもつことにつながった。③では、まとめたことをもとに交流することで「江戸幕府が長く続いたのは様々な政策を行い力を強めたから」と理解を深めることができた。今後は、子供が自ら学んでいけるような学習問題や人に着目するための手立てをとり、学習を進めていくことができるようにしていきたい。

第24回神奈川県小学校教育研究会社会科部会

「川崎大会」報告

令和8年1月21日(水)

川小社研では「深い学びの実践に向けた一人一人が生きる社会科学習」を今年度の重点目標として、研究を深化してまいりました。概念的知識の獲得・活用を通して、子どもが自ら学び、社会と関わり、主体的に行動する力を育てていきたいと考えました。当日は4会場にて授業提案を行いました。各会場では、合計約320名の参加者の方々とともに、子どもの姿をもとに活発な協議が交わされました。

〈授業提案〉

3年「市の移り変わり」～100年の歩みと未来への1歩～

川崎市立下平間小学校 宇賀神 英

目指す子どもの姿を「自らの学習を調整し、概念的知識を獲得・活用していく姿」としました。本時では、単元の学びをまとめた児童の年表を基に、考えを伝え合う活動を行いました。「単元の問い」の解決に向け、一人一人が「社会的事象の見方・考え方」を働かせながら、自分の考えを説明する姿が見られました。研究協議や指導講評の中では、「市の移り変わりの教材化」や「教師の見取り」、「概念的知識」などについての話題が取り上げられました。

4年「自然災害にそなえるまちづくり」

～今後起こりうる自然災害から人々を守るために～

川崎市立久地小学校 野土谷 淳

目指す子どもの姿を「主体的に学び続け、社会の仕組みやつながりを理解し、社会の一員としての自覚を高める子」としました。本時では、子どもたちが問いの解決に向けて自分の必要感に応じた場に行ったり、既習や資料を関連付けて共通点を見出したりする姿が見られました。協議会では、子ども自身が多様な学びを選択できることよさや、複数の事例を扱うことのメリット・デメリットなどが話題となりました。

5年「環境をともに守る」

～川崎市の公害と改善に取り組んできた人々～

川崎市立西菅小学校 清野 貴史

目指す子どもの姿を「問いを追究し、ともに学び、よりよい社会や自分の在り方を考えようとする子」としました。本時では、「工場・市民・市」の取組から、協力関係についてまとめようとする姿が見られました。「川崎市の公害は三者が一体となって解決した」「簡単に解決したわけではなかった」などの気づきが生まれました。協議会では、グループ内の気づきをどのように全体に広げていくのか、教師の出番について話題となりました。

6年「歴史を学ぶ意味を考える」～未来へのOne Voice～

川崎市立橋小学校 佐藤 壮太

目指す子どもの姿を「自ら課題を見つけ、知識や技能を活用して、他者と協働しながら新たな概念や価値に気づき学ぶ姿」としました。本時では、未来志向の問いを設定したことで、子どもが意欲的に既習を生かしながら考えようとしていました。また、それまでの歴史学習の継続的な振り返り活動が子どもの考えの礎となっていました。さらに深い学びを目指すためには、教師が思考を促すような問い返しやファシリテートが大切だと協議で話題となりました。

神奈川県小学校教育研究会中央研究大会川崎大会報告

令和8年2月4日(水)

全体会・講演会 (川崎市教育会館)

講師 脚本家 徳永 友一 氏

演題

「自分らしく生きるために大切にしたいこと

—「学校でなぜ学ぶのか」改めて考える—

分科会(川崎市立小杉小学校)

社会科部会では、次の二人から実践提案がなされた。

○第一提案

児童の問いから集団思考が生まれる授業づくり

～自ら知識を獲得し、追求を続ける子を育む～

藤沢市立岡小学校 菱伊 諒

○第二提案

資質・能力の育成に向けた深い学びの実現のための

よりよい学習活動の工夫

川崎市立生田小学校 柴田 尚希

どちらの分科会においても、県下から参加してくださった先生方と、子どもたちが主体的に取り組む社会科の在り方や、学びをつなげていくための手立てについて活発な議論が交わされました。

地区だより 「大和地区」

大和地区では、市内19校の小学校から研究会員が参加し、研究主題を「社会とのかかわりを実感する社会科の研究」として研究を進めています。全6回の中で、児童が社会的現象について、体験したり、活動したりして自分事としてとらえ、主体的な学びにつなげることを目指した授業づくりを目標に研究テーマを設定しました。

6月の第3回では、神奈川県立総合教育センター教育図書室に見学へ行きました。教育図書室には県内の教育に関する資料が、過去数十年をさかのぼって集められていることが分かり、その豊富な資料をもとに、各学年で教材研究を行いました。

11月の第5回では、6年生の「戦争と人々の暮らし」という単元の導入の授業が行われました。第3回で見学した総合教育センター教育図書室にある資料を活かした授業を実践され、教科書の資料との比較が協議の柱としました。戦時中の社会の様子や人々の暮らしを調べるきっかけとして「戦時中(部分的に戦後)に使われていた教科書の实物」を資料として提示することで、子どもたちの気づきや疑問を生んでいました。

今年度研究した「社会とのかかわりを実感する」という視点は、単元計画や本時の展開において、とても大切な視点だと思うので、今後に生かしていきたいと考えています。

(大和地区副部会長 大和市立深見小学校 堀口貴史)

地区だより 「座間地区」

座間地区においては、市内11校の小学校より選出された13名の研究会員が、「社会的な見方・考え方を働かせる指導法の研究と実践～社会的な見方・考え方を働かせる教材の研究と授業での指導法の検討～」という研究テーマを掲げ、日々研鑽を積んでいます。

本年度は、令和8年度に開催予定の神奈川県小学校教育研究会を見据え、授業研究を軸とした活動を展開しました。具体的には、代表教諭による公開授業の実施や参観、発表に向けた諸準備に注力しました。本研究の中核的な取り組みは、「体験活動」と「学び方の選択」を関連させた単元構成の構築です。これにより、児童が社会的現象に高い関心を抱き、自ら課題を追及することで「深い学び」を実現することを目指しています。

また、研究会では、座間市教育研究所より講師を招き、「地域教材を活かした社会科の学習～座間市の郷土と歴史について～」という主題のもと、座間小学校に附設された「いずみ文庫」の視察を実施しました。これは、地域固有の歴史の変遷や文化財保護活動の現状、および教材活用の実際を習得する上での、重要な機会となりました。

今後の展望として、児童が郷土の価値を再認識し、さらなる「深い学

び」へと接続できるよう、座間市内の地域資源を包摂した社会科学習の在り方を継続的に検討していく方針です。具体的には、「座間遊園」や「古墳」といった特定の対象を焦点化し、教材研究を一層強力に推進していく所存です。

今後も部員にとって有意義な時間となるように研究を進めて参りたいと思います。

(会報 座間地区担当 座間市立東原小学校 中村 郁穂)

地区だより 「海老名地区」

海老名地区では、「児童の主体的な学習を生かした社会科の授業づくり」を研究主題に掲げ、日々研究を進めています。目指す児童の姿に迫れるよう、専門的な講習や各校の実践報告を重ねてきました。

今年度は、外部講師を招いた部会の充実に努めました。第1回部会では市役所危機管理課より講師を招き、市内で想定される地震や風水害への対策をはじめ、避難所の配置や体制整備、災害時の応援協定、防災設備の維持管理、そして訓練の実施に至るまで、市の防災体制について詳しくお話を伺いました。また、校庭や公園に設置された飲料水兼用貯水槽や、備蓄食料・毛布等を備えた大型備蓄倉庫の見学を通し、実際の防災設備への理解を深めました。第2回部会では、大学附属小学校の教諭を講師に迎え、人口資料の読み取りから児童自らが県の特徴に着目して学習問題を見出し、予想を立てられるような授業構成について学びました。第3回部会では、これらの学びを踏まえた各校の実践報告を実施しました。6年の五輪や明治の国づくりの題材、3年のスーパーマーケットづくりを通した工夫の考察、4年の伝統行事における人々の思いに触れる授業など、児童の主体性を引き出す問いや資料活用について、板書記録を基に活発な検討を行いました。思考を途切れさせずに授業をまとめる難しさ等の課題も共有し、部員全体での授業力向上に努めています。

今後も、令和9年度の神奈川県社会科研究協議会での発表に向け、検討を続けながら研究を推進します。

(海老名地区部会長 海老名市立有鹿小学校 渡邊 泰紀)

編集後記

学習指導要領の改定に向け、令和7年9月には「論点整理」が出され、引き続き「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、様々な工夫が必要であることが明らかになりました。そんな中、本研究部会では、今年度も子どもが学習の見通しをもって主体的に学びに取り組む「単元を見通す学習問題」と子どもの学習意欲や切実感とともに、社会的現象の意味や単元のねらいに迫る「本気の学習問題」を学習過程の軸として、授業実践や研究・研修活動に取り組んで参りました。

夏の学年別研修会や小倉教科調査官による恒例の夏季特別講演会は今度も大変盛況でした。また1月に行われた川崎地区4校における授業研究会では、どの会場でも熱心に討議が交わされる様子が見られました。県小教研中央大会川崎大会も含め、参加された皆様、提案・助言・運営等をしてくださった皆様、本当にありがとうございました。

本県では、令和10年度に通算5度目の全小社神奈川大会を開催いたします。大会の成功に向け、今後も全县を挙げて研究活動を推進していくことができればと思います。引き続き、皆様のご理解、ご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

事務局長 場家 誠 (横浜・瀬谷さくら小学校)